

卒業研究紹介

(昭和三十五年度)

シントレーゼマンの

履行政策について

赤塚 裕

ドイツ・ワイマル共和国の外相、シントレーゼマンの履行政策についての評価は、一般には、對西歐協調を意図したものとされている。いわゆる「履行」政策によつて、ドイツの國際的地位は向上し、シントレーゼマンは西歐陣營より好評を得た。しかし、彼の「履行」政策の裏には、権力的思想が潜んでいたのではないだろうか。彼の真意を検討してみた。

結城家法度の分析による

「戦国大名結城氏」の領内

支配に関する一考察

上小沢 勲

戦国大名に関する個別的研究であり、對

象は「下総結城氏」であつて、結城氏の領内支配の基準であつた「結城家法度」の分析を通して上からの支配体系を明きらかにすることによつて、戦国大名結城氏の歴史的性格、更には太閤様地の前提への接近を試みることを意図したものである。

日露戦争について

細田 紋市

私の研究は卒業論文ではなく概説です。改められた社会科の学習指導要領によると、近代日本の発展は戦争を契機とし、戦争に勝利することによつて国力の充實がなされたとい考え方が強く出されています。特に日露戦争の勝利による國際地位の向上ということが強く云われていますが、これに對する疑問から日露戦争というテーマを選びました。

日露戦争當時において、ブルジョアジー及びプロレタリアートほどの程度の階級的成長をみせていたか、ブルジョアジーは日露戦争にいかなる階級的役割をになつたかを考察してみた。特に後進国における資本

主義發展の特徴が帝國主義の形成にいかなる作用を及ぼすか―早熟な独占の形成の及ぼす影響―遅れた封建的諸要因がプロレタリア抑圧のためにどのように利用されたかを検討してみた。

江戸中期の両替商資本の

性格と機能

――特に幕府と
兩替商資本との関係の中で

村田 昌三

研究のねらいは、大阪、江戸を中心として拾頭してくる兩替商の出自と業態、又封建体制の中でどのような歴史的役割を担っていたかをあきらかにすることにあり。特に問題の中心は、幕府の幣制改革と、貨幣を媒介として成立してくる兩替商の對應の実態を、享保期を中心に追求した。

南北戦争に関する一考察

――リンカーンの保守性について――

龍崎 千佳子

目的はリンカーンの保守性を彼の奴隸制

度の消滅への努力を通して追求する事にあつた。

リンカーンの對策は父祖達が望んだように奴隸制度を准州へそれ以上拡大させないで一所にとどめておき、次に補償金付きの解放を説得によつておこなつていき百年或はそれ以上かかるかも知れないが結局奴隸制度が消滅するようにする事であつた。そして解放された黒人を中南米かアフリカに植民させようとした。もしも南部十一州が分離しなかつたならば四年の任期中彼の政府は色は違ふが自分達と同じ人間を財産とみなす人達に對して奴隸制度については南部ばかりでなく北部も又その責を負うべきであるとの理由のもとに准州への拡大に反対する以外に何ら独立宣言に示された自由の原理の維持のための努力はなされなかつたにちがいない。リンカーンが戦争を積極的に引きおこそうとしたのは連邦の破壊に遭遇したためである。

このような彼の政策及び態度の中に演説及び書簡を通して、或は伝記の助けをかりて昔のモノを昔のままに保持しようとする言動を見いだす事ができた。だが昔からある制度を自分達の時代の思潮に合せて考察

しているのだが、そうとは自分で気がつかず、このような解決は古人もしていたと考へて、自分はこの制度を憲法制定當時の人が考へたと同様な方向に持つていくよう努力しているのだと考へている時、これを保守的な考へ方と言つて良いであらうか、確かにワシントンもジェファソンも奴隸制度を悪と認めていた。

そして彼らは晩年に自分の奴隸を少なくしている。しかし自己の奴隸をさへ完全に解放しようとはしなかつたのである。憲法制定当時まだ繰繰機は發明されておらず奴隸度經濟の不振が述べられていたのである。

水戸藩荒政の一考察

——天保四・七年の飢饉を中心に——

和田 義夫

水戸藩の荒政を、水戸藩の財政とその備荒貯蔵制度を関連させて考へ、次に飢饉時の救済の對象と半年における救済の對象を考へて最後に天保の飢饉の救済と、檢地から斉昭の基本的な農政を考へてみた。かか

ることを史料を追つて実証的に考察してみました。

色川三中の研究

——常総地方における國学の展開に関する一考察——

鈴木 暎一

この研究の目的は、色川三中という地方の一國學者を通して、常総地方に國學が浸透していく実相を明らかにすることにある。

そのさい、いわゆる學統によつてた教師と入門との系譜を辿るだけでなく、それをもとにしたがら、國學が現実社会の中でいかなる役割を演じていたのか、という点をとくに力を入れて敘述しようとしてみた。

けれども、この研究過程において、史料的な制約と方法的な困難さとの故に、いろいろな障害に直面したのであり、それはまたひろく地方文化の個別研究にも共通する点であるが、そうした私の意図も何程実現されたかというとはなはだ心もとない。だがこれまでの色川三中の研究は、「國學

者伝記集成」と「贈從五位色川三申翁略伝」といふ概観的な文獻があるにすぎず、いまだ検討はきわめて不十分であるといえるし、さらに地方文化史解明が地方史研究の弱点となつてゐる現状にも思いをいたし、浅学非才をも顧みず、この研究の事を決意したのである。幸いその途上において若干の新史料を発見できたので、その意味でもわずがではあるが三申の研究に一步を進めることができたことと思う。

いま本研究の構成を概観すると次のようである。

第一章——色川の家系と家業、とくに土浦の町方特権商人としての色川家を考察しながら、三申の生活環境を明らかにした。

第二—第三章——三申の成長の跡を追いつながら彼が色川家の財政窮乏を打開する過程をのべ、あわせて三申の生活方針並びにそこに示された庶民意識の発現をみた。

第四章——本研究の要所であり、三申の国学入門とその後の活動を四項に分けて叙述し、国学普及に果たした彼の役割をに前述の時代と生活環境を、考慮に入れなが

ら、具体的に追求してみた。

第五章——「晩年と死後のこと」と題して、それについて簡単な説明を加えた。

大宝令による兵制

物 井 稔

江戸中期における

町人層の家族意識

——梅巖心学を中心に——

細谷 美智彦

ナチズム発生の

根本的原因について

松本 芙美子

史学会動向

昭和三十五年度

茨城大学史学会大会

日時 十一月二十七日(日)

午前十時より

場所 茨城大学 一〇二番教室

(研究発表)

○藤原頼長庚子庚申の講筈

中村 宏

○穀物法の撤廃について

佐々木弘安

○水戸道中牛久宿の機構

木村 宏

○香取社領における封建制の研究

根本 茂

○グーツヘルンシャフト成立前期の諸問題

芳賀 正治

○一条兼良の学問

宮田 正彦

(講演)

○江戸時代の呉服飾経営

中出 易直

○ある一つの物語

鳥田雄次郎

昭和三十六年度

茨城大学史学会研究発表会

日時 六月十七日(土)午後一時より

場所 茨城大学付属図書館視聴覚教室

○明太祖洪武帝の土地政策

南 秀利

——屯田政策を中心に——

○中世後期の荒廃問題

芳賀 正治

——グーツヘルンシャフトの形成に關して

○色川三申の研究

鈴木 暎一

——常総地方における国学の——
展開に關する一考察——